



はだしのゲンと駆けた夏

原爆を扱った中沢啓治さんの「絵本はだしのゲン原画とマンガ展」を8月1日(木)から31日(土)まで開催しました。きっかけは20代の学芸員実習生の発案でした。酷暑の8月に、予想を上回る2,570人の来館者で終了しました。

中沢ミサヨさんとのトークイベント

入口で訪れる方を迎えるゲンの等身大パネルをはじめ、広島平和記念資料館から借り受けた絵本原画10点の選択、コミックから印象的な場面をつないで再構成したマンガパネルは、「ピースあいち」のボランティアが、子どもにも大人にも興味を持ってもらえるように、精一杯の熱意で制作しました。展示室中央には作者・中沢啓治さんが愛用したペンなどの執筆道具と、連載第1回目1973年の『少年ジャンプ』を置き、追悼の意を込めました。自由に手に取って読んでもらえるように取り揃えた古本やコミックは、よれよれになるくらい人気でした。

8月3日、啓治さんの妻・中沢ミサヨさんをお招きして満席となったトークイベントは、第1部で中沢啓治さんが被爆体験を語るドキュメンタリー映画「はだしのゲンが伝えたいこと」を見た後、第2部ではミサヨさんに「はだしのゲン」制作のエピソードを語っていただきました。その場には外国語版翻訳「プロジェクトゲン」の皆さんが参加されており「はだしのゲン」が20カ国語に訳されて海外でも読まれていることが紹介されました。

小学生からシルバー世代の幅広い参加者からは、



トークイベント



会場風景

世代を超えて読み継が

れているそれぞれの「はだしのゲン」への想いが話され、最後にマンガの中で戦時の鬱屈をはらし歌われた替え歌を全員で歌いました。

松江市の閲覧制限報道の反響

終盤になって松江市の「はだしのゲン」閲覧制限が報道され、「それでピースあいちへ来てみた」という反響もありました。

会期中を通して、親が子どもにパネルの説明をし、会話しながらじっくりと見て回る様子を幾度となく目にしました。あるアンケートには「二人の小学生の息子に、広島の式典をテレビで見て説明するくらいで戦争の話はなかなかする機会がありませんでした。今回、息子たちが大事なことを少しでも感じ取ってくれたら嬉しいです。戦争を知らない世代の親として何ができるのか、すべきなのか。このような資料館が運営され続けることを願います。」と書かれていました。

中沢啓治さんが残したメッセージ「人類の最高の宝は平和」を、ゲンと共に「ピースあいち」から届けることができ、また、たいへん多くの方にご協力をいただいたことを感謝申し上げます。

ピースあいち 第15号 寄贈品展

毛ノが語る戦争とくらし

◆12月5日(木)◆
◆12月25日(水)◆
3F展示室にて
市民のみなさんから
寄せられた
100点の戦時遺品

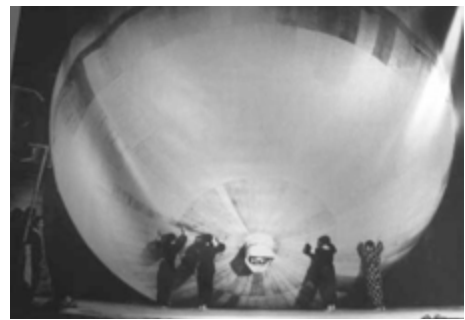
「風船爆弾を語りつく!」 -証言者の思いを発信

11月30日(土)に、椋山女学園の大学生、高校生が自らの手で調査し、制作した「風船爆弾を語りつく!」番組を発表してくださいました。知られていない史実を掘り起こす作業は大変であったろうと思われそうですが、良くまとめられていました。「風船爆弾と取り組み」について、椋山女学園大学の柗窪優二先生に書いていただいた文章を掲載します。

「風船爆弾」とは、太平洋戦争中の旧陸軍・秘密兵器。和紙とこんにゃくのりで作った気球に爆弾をつけ、上空のジェット気流に乗せてアメリカ本土を攻撃する兵器で、1944(昭和19)年秋から翌年春まで、全国で学徒動員の女学生が製造に従事し、約9,300発が攻撃に使われました。アメリカ各地で山火事が起き、1945年5月、オレゴン州で風船爆弾・不発弾に触れた民間人6人が死亡した記録が残っていますが、詳細は歴史の闇に埋もれています。

椋山女学園高校放送部は2年前に、名古屋市千種区の同学園で風船爆弾が作られていた事実を独自に取材して、ラジオ番組(ドキュメンタリー)を制作、大きな反響が寄せられました。その後学園関係者の調査で製造に従事した卒業生3人が見つかり、今年には元女学生の詳しい証言インタビューを紹介する形で、改めてラジオ番組を制作しました。

当時は学園の室内プールを板で覆って、13~15歳の生徒120人ほどが、風船爆弾を作っていました。



また、椋山女学園大学柗窪研究室ゼミ(文化情報学部)は、卒業生証言のほか、風船爆弾を開発した旧陸軍登戸研究所跡や関連資料が展示してある江戸東京博物館も取材し、映像ドキュメンタリーを制作しました。

風船爆弾を製造していた元女学生は今では82~83歳、この戦争体験を高校生たちに語り継ぎました。高校生、大学生が制作したラジオ・テレビ番組では、語り継がれた戦争体験をもとに、平和の大切さを発信しています。元女学生3人は終戦から68年が経過した今、風船爆弾の戦争体験を大勢の人に伝えたいと話しています。

名古屋芸術大学

「peace nine 2013 巡回展」

9月10日(火)~28日(土)、昨年に続き第2回目の「名古屋芸術大学peace nine 2013 巡回展」を開催しました。



平和をテーマにした絵画や立体作品に、今回は福島原発事故をテーマに麻布に描かれた母子像が加わりました。出品者は学生や社会人学生、活動中のアーティストなどの幅広い世代です。作品に添えられたキャプションを読み、制作にあたっての思いを感じながらじっくりと鑑賞しました。企画者の長谷川直美さん(版画コース非常勤講師)の呼びかけで集まった若い学生たちと展示作業を一緒にするのも楽しいものでした。

歴史で結ぶフィリピンと日本 -元兵士からのメッセージ

8月10日(土)、「PATH」のメンバーが、彼らの活動が広がってつながりを持った「ブリッジ・フォー・ピース(BFP)」



と共催して「ピースあいち」で開催した興味深いイベントでした。フィリピンで闘った元日本兵士の証言とフィリピンの戦争被害者のDVDを観賞して、日本の行った悲惨な戦争を知り、学びながら、未来に向かって平和について考える場を作りました。ワークショップ方式で、和やかに、かつ活発に意見交換をし、「ピースあいち」も新しい仲間とのつながりをつくることができました。

※「PATH」:名市大の学生が中心となって、「ピースあいち」の英文ガイドブックを制作。その後、「ピースあいち」を支援しながら、独自の活動も行う学生団体。

※「BFP」:フィリピンの戦争犠牲者と元日本兵の方々の体験を聞きとり、ビデオメッセージによって両者を結ぶ活動をしている。

ボランティアが講師となる勉強会

「ピースあいち」には、地味ではあるものの、途絶えることなく続いている「ボランティア勉強会」という取り組みがあります。

ボランティア班企画のこの勉強会は、「ピースあいち」のボランティアが講師になるというのが原則。つまり、講師は活動を共にしている仲間というわけです。場所は「ピースあいち」交流広場。慣れ親しんだ場所で、顔見知りの人のお話を聞くという、アットホームな雰囲気の会です。

これまでの勉強会の内容は、次のように分類できます。

- 「ピースあいち」の展示内容について理解を深めるための講座
- 講師が、長い時間をかけて研究、実践してきたテーマについて語る講座
- 原発問題など、喫緊の問題について考える講座
- 他で行っているボランティア(チェルノブイリ救援中部や国連WFPなごやなど)の活動内容を紹介する講座

毎回、講師は分厚い資料を用意して、時間のた



つのも忘れ、実に熱心に講義をされます。日曜日の10時からという時間設定にもかかわらず、毎回20人前後の参加者があるのは、講師の熱意が直に伝わり、その探究心に感心させられる勉強会だからでしょう。

学ぶ喜びはいくつになっても衰えることはありません。むしろ年齢を重ねるほど、「もの」よりも、「学ぶこと」で満足感を得るほうが多くなっているような気がします。これからも、この勉強会を地道に継続していきたいです。

自主的な学び合い「調査研究会」

「ピースあいち」にはボランティア有志による「調査研究会」があります。研究会というと堅苦しいイメージですが、市民による学習運動、歴史の学び直しといった「平和に関する勉強会」(毎月第4日曜日)です。現在20数名の方が参加されています。

きっかけは開館1周年特別展『沖縄から戦争と平和を考える』(2008.4)に向けて全8回にわたる連続講座による学習会をもったことでした。元沖縄県知事大田昌秀氏、元沖縄国際大学の石原昌家氏、森英樹氏など豪華な顔ぶれを招いています。この中で沖縄現地フィールドワーク(2008.2)も実施し、学ぶことの楽しさを実感できたこと、これが調査研究会に発展しました。(正式スタートは2009年1月。今年で5年目を迎えました)

「ピースあいち」では過去4回にわたる「特別展」を企画してきました。これに向けて研究会では、テーマ設定、学習課題、学習方法、研究活動など、自ら意欲的に学習活動をつづけ、展示の中身を作りました。その中で「受け身の学び」から「協同の学び合い」に変わっていきました。1階のリニューアル展示



研究会の成果でできたりリニューアル(2012)もこの積み重ねの上にあります。

研究者による学術的な研究会ではなく、誰でもいつでも参加し学び合いが楽しくできる身近な存在が「調査研究会」です。一人ひとりの学びの姿勢と意欲が「平和の歴史を創る運動」につながっています。ここに他の平和博物館にはみられない大きな特色があります。

戦争体験の語りシリーズ



「ピースあいち」では、「戦争体験を語る集い」を行っています。今年も8月1日(木)から15日(木)まで、9人の語り手が話してくださいました。今年は例年に比べて参加者が多く盛況でした。その要旨です。

危険を感じて毛布をかぶった原爆体験

石原 隆さん(86歳)

8月6日



8月6日は夜勤明けで、寮に戻ろうとした時にフラッシュが目の前で光り、危険を感じて毛布をかぶった。爆風と爆音でもう駄目かと思った。外を見上げると火の玉が輝いてゆっくり上昇するとB29の翼が見え、パラシュートが落ちてきた。窓ガラスが飛び散り、何が起きたのかわからなかった。外にいた人々は全員、はがれた皮膚が手からぶら下がり、負傷者がどンドン工場の中へ入ってきた。被爆した人19万人。10日に呉に移動するまで、街は毎日燃え続けた。宿舎の跡地で兵器をつくり続け、15日の放送を聞き、東へ行く列車で帰名。チフスにかかり一カ月意識がなかった。自分の心と体を大事に生きてください。

絵で戦争を説明

間瀬時江さん(89歳)

8月1日

間瀬さんは知人から戦争体験を聞き取り、それを絵に描いてこられた。これが今回のお話のベース。この絵の背景については、娘さんが米軍の作戦を調査し、お話の奥行を深められた。参加者の注目を集めたのは、国宝名古屋城焼失と空襲下、男手のない中での女性・子どもの生活苦の話、半田の中島飛行機での勤労体験。なかでも三河地震で多数の友人を失い、戸板にのせて火葬場に運んだこと。九州知覧で見た航空機「天山」が、中島飛行機で自分たちが組み立てたものであったことなどの話でした。



玉音放送でホッとした

服部孝子さん(80歳)

8月2日

1945年(敗戦の年)5月の空襲で、南区の我が家は焼失。その焼跡で一日中呆然と座っていた。女学校へ入学しても全く勉強せず、農耕など勤労の毎日だった。天皇の玉音放送を聞いて、これで逃げなくても済むとホッとした。一緒にいた軍人は、備蓄物資を車に乗せ逃げ去った。

このような体験は、次世代の人に二度とさせてはいけないという、思いのこもったお話だった。



叔母の家が空襲で全滅

小島久志さん(80歳)

8月7日



1944年8月、国民学校6年男子組77名に加わり、三重県員弁郡の寺に集団疎開。朝の読経で授業が始まり、「教育勅語」や「戦陣訓」の暗唱が日課。用水路で体力づくりの水泳訓練、雑木林で食材の草採りも、国のために命を捧げる精神力の養成に繋がりました。

不安と緊張の中、唯一の楽しみは食事。かぼちゃの団子汁が定番。翌45年3月、空襲が激化した名古屋の家に帰りました。12日未明、「空襲警報」で土間の防空壕に潜り込みました。戸板の隙間から焼夷弾で浮かび上がったB29の編隊が堂々と飛行するのを見ました。

明るくなった頃、従妹が「家の防空壕で母と5人の弟妹が焼夷弾の直撃を受け全滅した」と涙声で駆け込んできました。叔母も「家も全焼した」と…。空襲の惨禍が我が家にも降りかかってきました。

空襲で亡くなった 友の死を看取る

望月菊枝さん(83歳)

8月8日

名古屋市第三高女で軍需工場へ勤労働員。三菱大曾根工場や移転した瑞浪の工場で「部品にヤスリをかける」「計器に塗料をつける」作業。電車の車掌なども女学生の動員仕事だった。昭和19年1月23日、第三高女の防空壕が焼夷弾の直撃を受け、42名が死亡。同級生を教室の戸板にのせ、看護した。人の皮膚、髪の毛、衣服が電線に…あまりの凄惨な光景に頭が真っ白、呆然の状態。

食べるものはなく、お弁当にはごはん1/4杯、じゃがいも1/2個、塩味もない。いつもひもじい思いでいた。授業は月に1回。学校へ行くのが楽しみだった。帯芯で作った足袋を下駄にうちつけ靴として使っていた。

戦後、わら半紙で作った教科書、墨を塗った古い教科書を思い出します。戦後、音楽の時間に初めて習ったのはアメリカの国歌でした。



学童疎開と妹の死

木下信三さん(78歳)

8月14日

小3の妹・みちこと共に岐阜県の恵那郡福岡村に学童疎開した。宿舎は当時の北恵那鉄道の「田瀬」駅近くにあった田瀬公民館で、同じ宿舎でも男子と女子に分かれていた。見えはするが、話のできる位置ではなかった。食事情が悪く、野草の入った「天井が映る」と言われた雑炊などで、栄養失調だった妹が下痢になり、親元に替えパンツの要請手紙を書いたりしたことも…。

妹の体調は悪くなる一方で、妹を引き取りに来るように親に手紙を書けと言われ、やがて父が迎えに来て妹の疎開は終わった。病弱な妹のことを心配して一日たりとも心の休まることのなかったので、「妹がいなくなって、本当に気が楽になりホッとした」。その妹さんは中学を卒業して間もなく亡くなるが、その命日3月31日がこの兄妹の学童疎開に出た日だった。



父の沖縄戦と平和への思い

中村桂子さん(60歳)

8月11日

中村さんの父・日比野勝廣さん(享年85)は沖縄戦で負傷し、糸数アブチラガマに三カ月間取り残され、奇跡的に助かった一人。日比野さんは「私の命は沖縄の民に、沖縄の自然に、守られ、救われた」「私には毎日が命日。戦争は命を使い捨てにする。勝っても負けても悲惨だ。次世代へ平和への努力を託します」と、戦争の悲惨さと平和の大切さを訴え続け、平成21年に永眠された。

中村さんは、「父の思いを受け継ぎたい。平和を思うだけではなく、行動しましょう」と呼びかけました。



悲しみの歴史—

「満蒙開拓団の記録」

平田和香さん(72歳)

8月15日

国策による開拓団の編成は、第1次から14次まで。愛知県は9次に応募。三合三河開拓団600戸。平田さんは、帰国者からの体験を「語り継ぎ部」として伝えている。

昭和恐慌に苦しむ農民は、国策である「王道楽土」を夢見て、入植地に向かう。食べるのに苦労はないが、土地は中国の人々から奪ったもの。昭和20年8月14日付の召集令状を受け、開拓農民は北蒙の軍師団に出頭。ところが軍はすでに撤退。初めて敗戦を知る。軍に遺棄された開拓民は、途中で死者を埋葬し、各自の責任で逃げる。収容所にたどりついた人は幸せ、そこは幽霊屋敷のようだったが…。

帰国するも満蒙入植時に人手に渡したため土地はない。開拓民に対し、国は帰国船の支援も、帰国後の生活も全く考えてくれなかった。翻弄された悲しみの歴史であった。



枕木1本、1人の死 —シベリア抑留

河村廣康さん(89歳)

8月13日

昭和19年1月25日、大阪連隊に21歳で入隊。2週間後満州(奉天)の193(イクサ)歩兵部隊に配属され戦車の通信士となる。日本は資源がなく銃は10人に1丁、5人に1剣。教育も撃ち方のみ。終戦後シベリア・バイカル湖近くのタイセットに送られ過酷な日々だった。収容所はバラックの板造り。真冬は-30℃で天幕には5cm位の氷が張り、夏は30℃、蚊やブヨに悩まされた。「腹一杯食って死にたい」。黒パン一切れと僅かなスープだけの食事で栄養失調の上に、鉄道の枕木用の松の伐採は重労働。1本で捕虜が1人死ぬといわれた。「全員生きて帰ろう。」唯一の願いも叶わず…。遺骨収集は戦後処理の重要問題として早急を実施してほしい。異国の地に眠る30万ともいわれる同胞のために！



戦争の中の子もたち展

2014年1月14日(火)~2月28日(金)

1931年に始めた戦争は15年にも及びました。当時の子どもたちは、どのように過ごしたのか。当時の教科書、子どもたちの遊び、学童疎開、子ども向けの軍国歌謡など、いろいろな切り口で振り返ってみました。「のらくろ」や「冒険ダン吉」というマンガ本も揃えました。手に取って読むことができます。

充実した「語り手の会」の活動—2013年度上半期

本年度も、語り手の会の活動は6月24日(月)に開催した「第5回例会」でスタートを切りました。以下に掲げる3本柱の活動を中心として、引き続き「語り継ぎシナリオ」の作成と「語り継ぐ私の戦争体験 第二集」の発刊を本年度の課題としました。

(1)平和学習支援事業

県市で設置している「戦争に関する資料館調査会」からの委託による事業で、開始以来5年目に入りました。本年度は、名古屋市内4校、その他県内の学校9校、計13校の小中学校で実施することになりました。10月末現在で7校を終えました。

(2)夏の戦争体験を語るシリーズ

本年は、8月1日から15日までの間に9人の語り手に語っていただきました。シベリア抑留の体験、満蒙開拓団の記録といった貴重な体験が報告されました。

(3)その他の語り活動

学校や各種団体からの派遣要請に応じて語り手を派遣しました。10月末現在で、小中学校14校、高等学校1校、各種団体2団体、計17回に上りました。この中には昨年度に続いて、日進市からの依頼による日進市立小中学校6校が含まれています。



また、「ピースあいち」へ来館した11の学校・各種団体にも希望に応じて語り手による戦争体験の語り事業を行いました。

【体験談を聞いた子どもたちや先生の感想文】

☆戦争体験の話は今まで聞いたことがありませんでした。戦争は人を殺し合い、戦争とは直接かわりのない子どもたちまで犠牲になってしまう、とても悲惨なものだということを改めて実感しました。戦争はこれから先、絶対におきてはいけなと思います。平和な世界に生まれて本当によかったです。戦争のことは忘れないようにしたいです。(中学校3年女子)

☆今日のはなしを聞いて戦争について考えることができました。戦争というのはなんのとくがあるのか。戦争なんて何百人も何千人もの人がむだに死んでしまうのに戦争の意味はなんだろうか。(小学校6年男子)

☆原爆などの核兵器は本当に怖いと思いました。これから日本が絶対に戦争をしないで、核を使うものを地球から無くし、それができないのであれば、核の怖さをみんなに知ってもらって核を使ってほしくないと思いました。(小学校6年女子)

☆せんそうはこわいからいやです。たべるものがないのもいやです。せんそうをしたくないです。(小学校2年男子)

☆戦争という資源の取り合いであらそいをして、その結果たくさんの人を殺してしまい、人々の心に傷をつけてしまった。そんな戦争の話を聞いていると、とてもかなしくなり、そしてこのようなことを二度としてはいけないとあらためて思いました。この話をこれからも後世に伝えていかなければいけないと思いました。(小学校6年女子)

☆広島での体験は、たいへん心に深く入りました。先日、原爆資料館へ行ったときに見たことと、語り手さんの話がつながり、より戦争に向けてむごさを感じました。児童もたくさんメモを取り、一生懸命聞いていました。後の作文の中でも戦争に対する深まった考えが書かれており、今回の活動はとてもよかったと思います。(小学校担任教師)

☆実際のご体験を伺うことで、戦時中のみならず、現在もなお、体験者に悲しみを背負わせるものが戦争である、ということが(生徒たちに)実感できたようでした。教員自身も、本や映像だけでは知れないことを学べる、貴重な時間となりました。(中学校担任教師)

戦跡班企画の戦跡見学ツアー

10月14日(日)、戦跡班が企画した見学ツアーがありました。当日は月曜日ながら、三連休の最後の日でどこも混み合っていました。バス一台45名の参加者で、晴天に恵まれ意義のある一日でした。

最初に訪れたのは伊那市上の原にある伊那飛行場跡でした。ここでは現地に在住の元高校社会科教師の久保田誼先生から、旧伊那飛行場建設の目的、歴史的経過等について詳しいお話を聞きました。飛行場や地下施設建設などの労働力は雇用朝鮮人の大動員や国民学校の上級生や高等科児童だったそうです。あと先生自身が伊那市から譲り受けたというレンガ造りの弾薬庫(今は自宅用倉庫として使用中)を見せてもらうことができました。

もう一つの訪問地の阿智村満蒙開拓平和記念館は今年4月にオープンしたばかりで歴史解説のDVD視聴と多くの貴重な展示品を見学しました。日本の中国侵略戦争を進めるための満蒙開拓団の役割等を知ることができました。山奥から村をあげて渡満、苦勞



伊奈飛行場跡の説明文

を重ねての開墾、敗戦後はまた、たいへんな目にあわされた、これが戦争というもののだと。

途中の昼の食事は伊那食品工業(株)経営の「かんでんパパガーデン」内にあるレストランでおいしく食べました。この会社は原則ほとんど全ての従業員が正社員ということで興味をひかれました。次の企画を楽しみにしたいです。

戦争と平和を考える ブックレット4冊

「ピースあいち」が収蔵している戦時遺品はざっと2,500点を数える。このうち常設展示は約350点。この収蔵資料を活用して随時「企画展」を催している。

当館では開館以来、調査研究会を設け、学習や調査研究を続けている。その成果として、これまで4つの特別展を開催することができた。その展示内容を「ブックレット」として刊行した。特別展を観る機会がなかった方には学習用とし、あるいはグループでの研究テキストとして活用していただければ幸いである。



ブックレットNo.4『現代の戦争と平和 - 21世紀を共に生きるために』

- 『名古屋空襲と空爆の歴史—いま平和を考えるために』
- 『教科書にみる戦争と平和—子どもたちはどのように育てられたか』
- 『沖縄から平和を考える—ウチナーとヤマトの架け橋に』
- 『現代の戦争と平和—21世紀を共に生きるために』

今年も「ピースあいち年末祭」 開催！ 入館料無料

12月8日(日) 午前11時～午後4時

餅つきと、常滑市で活動している和太鼓グループ「常楽」の演奏で始まります(太鼓打ちも体験できます)。つきたてのお餅は一皿100円。このほか、コーヒー・カフェも開店(1杯100円)。また、「ピースあいち」の「缶バッジ作り」や木の実での「リース作り」にも参加できます(無料)。



昨年の「ピースあいち年末祭」の様子



資料館探訪 8

毎年、2千人のユダヤ人が来館
—杉原千畝記念館

杉原千畝記念館は八百津町の人道の丘の上にある。総檜造りのコテージ風の洒落た建物である。

ナチスの迫害でリトアニアの首都カウナスに逃れてきたユダヤ人が日本通過のビザを求めた。杉原千畝(1900-1986)は日本政府にビザの発行を打診するが、ドイツと協定を結んでいる政府は拒否する。千畝は独断でビザを発行する。その数2,500枚、家族を含めて6,000人余の人たちがシベリア鉄道を経由し、日本を通過して生き延びることができた。そのため千畝は日本のシンドラー(ドイツ人実業家で1万人以上のユダヤ人を救った人)と言われる。八百津は杉原千畝の生誕地である。

1階は千畝の生涯が年表風にまとめられている。展示物の中に千畝の小学校の卒業証書があったが、平

民杉原千畝と書かれていた。戸籍上だけかと思ったら戸籍身分が卒業証書に書かれているのは驚きであった。千畝が発行したビザの本物とコピー



千畝の像と記念館

が展示されている。映像コーナーでは千畝のビザ発給を決断した過程が描かれている。

1階の奥の部屋はリトアニアのカウナスの執務室が再現され、千畝の肉声がイヤホンで聞けるようになっている。2階は展望塔とユダヤ人のお礼の手紙コーナーになっている。

たまたま、私が訪問した時、30人ほどのユダヤ人の団体が来ていた。学芸員に聞くと、年間約2千人のユダヤ人が訪れるとのこと。イスラエルのツアーには杉原記念館が組み込まれているとのこと。ヘブライ語が分かる通訳ガイドもいる。(N)

月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

会員確保1,000名をめざして

「ピースあいち」の基本財源は、大人300円(子ども100円)の入館料と会員の皆さんの会費(正会員=6000円/賛助会員=3000円)です。「ピースあいち」開館以来数年間、正会員・賛助会員合わせて約800名で推移してきましたが、最近大きく減少してきました。基本的要因は会員の高齢化です。

この現状に危機感を抱き、私たちはこの7月～8月、集中的に会員拡大、特に賛助会員の拡大に取り組みました。その結果、9月末現在、正会員355名、賛助会員582名、合わせて937名になりました。

私たちは、当面1,000名の会員確保をめざしています。それを収入に換算すると正会員400名、賛助会員600名で420万円です。「ピースあいち」の年間経費は約900万円超、現状は不確定な助成金に頼って運営しています。自主財源の確立は、まず会員の拡大です。賛助会員の会費3000円、換算すれば1日=10円。ぜひ会員となって「ピースあいち」を支えて下さい。

「ピースあいち」への交通のご案内



【ピースあいちの利用案内】

- 開館日 火曜日～土曜日
- 開館時間 午前11時～午後4時
- 休館日 日曜日・月曜日・年末年始
- 閲覧料 大人 300円 小中高生 100円
- 2階の常設展示室のほか、1階には「現代の戦争と平和」というテーマの常設展示、3階には「戦争と動物たち」の展示があります。1階には戦争に関する図書や戦争体験談のDVDライブラリーがあります。1階のみの利用は入館料は無料です。
- 学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

●編集後記●

先の戦争時、米空軍が使用した油脂焼夷弾は1942年にハーバード大学の協力で開発したもので、「ナパーム」と呼ばれたが、日本では「焼夷弾」と呼んでいた。この呼び方にボランティアのYさんは疑念を抱いた。ここにある「夷」という字には、「蝦夷」とか「夷狄」に見られる蔑視の意を含んでいるからだ。「焼夷」とは「焼き払う」ということであり、『日本外史』にも出てくる言葉である。ただし、「夷」には「東方」という意があり、古代の中国では東方に住まう背の低い未開民族の事をいう。誇り高き日本人が、この言葉を使うことになるとは誰も思わなかっただろう。(S)